プロレタリア革命の勝利のために
公然たる党内斗争を展開せよ!!
――港地区委員会は声明する――

地区党ならびに全党の同志諸君!!

港区内ならびに全日本の戦斗的労働者、農民、学生、インテリゲンチャ諸君!!

日本共産党東京都港地区委員会は、民族主義と日和見主義にたいする限りなき憤激と、プロレタリア革命にたいする心からなる情熱とをもつて、この声明書を諸君の前に発表する。

われ〳〵は本日より、日本共産党を真にレーニン主義的規準にもとずく党に、そして日本プロレタアートの前衛党によみがえらせるため固い決意をこめ、全精力を傾けて党内斗争を開始するであらう。

われ〳〵が公然とかかる活動を開始するに至つたのは以下の理由にもとづいている。

（一）

われ〳〵は、九月下旬に第四回港地区党会議を開催した。そこでは、過去一ケ年の大衆斗争と党活動を総括し、現情勢と地区党の任務について出席した全代議員の熱烈な討論が展開された。そして今日、克服せねばならない党活動の最大の弱点は、党中央の諸政策、諸方針のなかにある無原則的な統一と団結論、その背景としての民族主義的偏向にあることを明らかにし、同時に安保改定と合理化の本質を日本資本家階級と労働者階級の基本的関係から把握し、明確な政治目標として岸内閣打倒の旗を高らかにかかげ、そのもとに労働者階級を結集すべきことを討論のなかで明らかにした。それはまさに戦斗的プロレタリアートの期待と要請に正面から応えたものであつたが、同時にそれは明らかに党中央委員会の諸方針、わけても六中総決議とは基本的に矛盾するものを含んでいた。したがつて港地区委員会は、党内に存在する明白な意見の相異を原則的に解決し、党を戦斗化させるためには、意見の相異を形式的な「組織原則」にはめこむことが必要なのではなく、意見の相異がどこにあるのか全党的討論を起すことを党中央が保証することであると繰返し要請してきたのだつた。しかるに東京都委員会、中央委員会は逆に第四回港地区党会議を否認する決定を下し、原則的解決方法をとらずに党規約をも無視して山崎地区委員長以下三名の地区委員の資格を剝奪し、あまつさえ一方的に「トロツキズム」のレツテルをはりつけて全都的、全国的に、また党内外に地区委員会多数派を排除するべきカンパニアを開始するに至つた。そして「決定に従わない地区委員は処分する」と言明し、理不尽な決定であつても盲目的に従ふ全く少数の地区委員のみを相手として「地区党の再建」をはかろうとしてきた。ここにいたつて党内民主主義は完全に圧殺され、官僚主義はまさに体系化されようとしている。しかもそれが、階級的視点を全く忘れ去つた「民族民主統一戦線」「愛国民主勢力の統一と団結」なる名のもとにおこなはれているのである。

戦後の階級斗争の最大の局面とも云える安保斗争のなかで、党は分裂の危機に頻している。「この重大な時機に絶体に分裂させるべきではない。党中央の方針がいかに間違つているとしても分裂することは敵を利することになる」と云う人達がいる。しかし分裂か統一かが今日の最大の問題なのではなくて、ブルジョアジーの攻撃の前に起ち上りつつあるプロレタリアートに正しい方針を提起しうる前衛党をいかに建設するかが問題なのである。一九四九年ドッジ、プランを転機に内外のブルジョアジーは労働者階級にたいする一大攻撃を開始し定員法、企業整理の前に、労働者階級は敗退し、日本資本主義の新たなる復活を迎えていつたこの時党は形式的には統一していたが、四五年以降の誤つた路線、徳田前書記長を中心とする日和見主義的、官僚主義的路線のため完全に敗れさつた。その結果党はレッド、パージ斗争にも勝てず深刻な分派斗争に直面した。レッド、パージ斗争では国際派の中の一分派であつた全学連のみが、当時「極左」のレッテルを張られながらも激烈な反イールズ斗争を行い大学教授のレッドパージを防衛したのである。全学連がレッド、パージー斗争に勝利した基本的な要因は、今日からみれば多くの不十分さをふくみながら、基本的に正しい方針のもとに斗つたことにある。

歴史の教訓は、形式的な統一が確保されていても、正しい革命的方針が欠如している場合には、プロレタアートは敗北することを教えている。今日問題なのは党中央の誤つた民族主義路線の下での統一にあるのではなく、眞に革命的な方針を安保斗争を斗う労働者階級に提起することにある。

従つてわれ〳〵は今こそ、正しい戦略戦術を抜きにした「統一団結論」「組織原則優先論」的考えを打ち破り、公然たる党内斗争を開始し、安保改定を粉砕し岸内閣を打倒し、政府危機を政治危機に転化させプロレタリヤ革命の勝利のために妥協なく斗い抜かなければならない。

（二）

現在、日本共産党は、日本革命の正しい戦略と戦術をうちたてていない。これは第七回党大会が開かれたにもかかわらず、戦後労働運動の科学的總括をもなしえず戦後一貫として存在する民族路線を克服しえずに、行動綱領を決定したことにもとづいている。共産党の基本路線とは革命の戦略である以上、現在の党には基本路線は存在しない。しかるに党中央は、第七回大会の政治報告および行動綱領をもつて「基本路線」にすりかえ、この「基本路線」のもとに行動上、思想上の統一をはかろうとしている。周知のように第七回大会でも党の戦略について論議は社会主義革命と民族民主革命とに基本的に見解がわかれていた。ところが今日「基本路線」にすりかえている行動綱領は、民族民主革命にもとづく党章草案の一部にしかすぎず、十分な討議もへずに採択されたものでしかない。したがつてこの行動綱領を基礎に種々の戦術をうちだし、それを思想的統一の規準にすりかえて下部党員におしつけることは、正しい党の原則だとは絶対にいうことができない。われわれはレーニンの次の非難をそつくりそのまま東京都委員会、中央委員会に与えることができるであらう。

「決議は「党の集会では」個人的意見と批判の「完全な自由」がゆるされるが、「大衆的な集会」では「党則はだれも大会の決議に予盾する行動をよびかけてはならない」といつている。これがいつたいどういうことになるのか。考えてもみたまえ。党の集会では党員は、大会の決定に予盾する行動をよびかける権利があり、大衆的集会では「個人的意見をのべる」完全な自由が「あたえられ」ないとは―

決議の作成者たちは、党内の批判の自由と党の行動の統一との相互関係の理解をまつたく誤つたのである。党綱領の諸原則の範囲内での批判は、党の集会だけではなく、大衆的な集会においても、完全に自由でなければならない。」（レーニン、批判の自由と行動の統一）

レーニンはまた党内に根本的な戦略上の見解の相異がある時は、分派活動を許さなくてはならないといつている。こうしたレーニン的組織原則は現在でも妥当しなければならず、スターリン的な一枚岩の党という考え方は打破されなければならない。われ〳〵の党が基本的戦略目標を確立していない以上、行動綱領を拡大解釈し、諸決定を下し、それに従わぬものを規律違反とすることこそ、マルクス、レーニン主義党の組織原則に全く違反するものである。こうした原則的な逸脱を党中央がしているからこそ、下部党員のあいだに、部分的逸脱が生れることもありうるのである。

党内のさまざまな思想とそれにもとづく戦略への考え方を公然と明るみにだし、党内の思想斗争と大衆的実践を通じ、そのいづれが正しいかを検証し、正しい党の恩想的統一をかちとることこそが現在の党の緊急の任務といわなければならない。

（三）

しかるにこのような誤つた組織原則と戦略（行動綱領の拡大解釈により党章草案通りの戦略が党の諸決定のなかには貫かれている）の上にどうして正しい戦術

がうちたてられるであらうか。正しい戦術は、正しい革命理論と戦略を基礎としてのみありうるのであつて決してその逆ではない。だから昨年の警職法斗争の時に党中央が、岸内閣打倒とゼネ、ストを支持する方針を十一、五の直前になつて始めてうちだしたこと、また安保定阻止国民会議においても党中央は岸内閣打倒のスローガンをだししぶつていたことは、党中央のあの誤つた革命理論の基礎の上では当然のことにすぎない。

さらに、十一、廿七の国会デモについてわれ〳〵港地区委員会は、中央委員会の総括には全く反対しないわけにはいかない。

われ〳〵は第一に、全学連を始め労働者階級の英雄的、革命的エネルギーを高く評価しなければならない。労働者階級の実力で警察のピケをつきぬけて国会の前庭におし入り歴史的な請願デモを行つて政府、ブルジョアジーの心担を寒からしめたことは、安保改定阻止斗争に極めて有利な局面をきり開いたのであつた。それは決して、アカハタで繰返し連日のように主張している「一部トロツキスト」の挑発的行動と片づけられるものではないばかりか、党中央のかかる「トロツキスト」攻撃は、一切のブルジョアジア、ジャーナリズムが、全学連に集中攻撃を浴せ、全学連を孤立させることによつて、労働者階級を再び、総評、社会党指導部の日和見主義の路線につれもどそうとする策謀に客観的には手を貸すものであると断ぜざるをえない。

さらに、革命的前衛党である共産党は、あの大衆のエネルギーをいかに有効に組織しえたであらうか、そこでの党の指導性はいかなるものであつたか、総評、社会党の指導部はともかく、共産党までもが、予測しえざる大衆の革命的エネルギーを摘確につかみ、これに意識性を与えて、次の行動を労働者階級と学生に呼びかけることができなかつた。それは、十一、廿七の偉大な斗争の背後にあるかくすことのできない事実ではなかつたか。総評、社会党が、口をそろえて即時解散のみをデモ隊に説いていたことは、この瞬間において明白な裏切りであり、日和見主義的方針でないということができるであらうか。少くとも前衛党の指導部は具体的行動と革命的扇動を結合させて大衆のエネルギーに応えるべきであつたのだ。具体的には、新橋までのデモの続行、十二、一〇にむかつてのゼネ、ストと再び国会へデモをというアッピール、岸内閣打倒のスローガンの確認等々である。

革命的扇動としては、われ〳〵が日本資本家階級の野望を紛砕するためには、日本労働者階級の革命的エネルギーを基礎とする以外に道はないことを訴え、資本家階級の口にする民主主義が、いかにデタラメなブルジョア民主主義であるかを暴露し、労働者階級の解放は、ブルジョア権力を打倒し、社会主義革命を実現する以外にはありえないことを力強く訴えることが必要であつたのだ。そうすれば、首都の労働者階級の革命的エネルギーは、さらに燃え上つたであらう。

かかることをなしえなかつた現在の党中央の日和見主義は党の総路線と無関係でない。党中央は、アメリカ帝国主義と日本独占資本を並列的に敵としてならべそのうち主要な攻撃目標をアメリカ帝国主義においている。われ〳〵も決してアメリカ帝国主義との斗いを放棄したりはしない。われ〳〵はただ日本のように高度に発達した資本主義国では、主要打撃を国内の支配階級である資本家階級わけても独占資本とその政治的代弁者である岸政府にむけることによつてのみ、当面の安保改定阻止の斗争にも勝利できることを主張するにすぎない。日本の資本家階級の観点からすれば、安保改定の道こそ、自己の政治支配体制の一層の強化であり、憲法の枠をこえ海外派兵をなし、帝国主義的進出をなしうる道なのである。だからこそ、従属か、独立かという党のスローガンは、日本の支配階級の階級的意図をおしかくし、日本労働者階級の革命的エネルギーをむしろ誤つた方向に発散させでしまうものにほかならないであらう。

（四）

われ〳〵港地区委員会は、以上のべてきた無原則的な機械的な組織原則と民族主義的、日和見主義的な路線をおしつける党中央の指導にたいして徹低的に反対し、安易な妥協を排し、真の思想的統一をはかるため、日本共産党港地区委員会として公然たる活動を開始するであらう。われ〳〵と党中央との間には、戦略、戦術、組織原則において決定的な対立が生じている。われ〳〵は、社会主義革命、プロレタリアート独裁を戦略目標とし、当面の平和と民主主義の斗争をこの観点より徹底的に斗い抜くことを戦術とし、先にあげたレーニン的組織原則にたちかえることに全力をつくすであらう。

党中央委員会は恐らくわれ〳〵に向つてヒステリックなレッテルはり挑発者、分裂主義者、党破壊者、トロツキストと攻撃を繰返すであらう。だが、労働者階級の革命的エネルギーを有効に組織することのできないものが、いかにヒステリックな攻撃をつづけようとも、それは日本革命運動にとつてなんらの積極的役割を果すことはできない。今日、問題なのは、全産業にわたる合理化をなしとげ、帝国主義的海外進出を目論むために、日本ブルジョアジーが自己の政治支配体制強化の最大の要としてうちだしてきている安保改定に、いかなる展望をもつて斗うか、労働者階級に正しく提起しうるプロレタリアートの前衛党を建設するとこなのである。この観点を忘れてかかる非難と攻撃にわれ〳〵が屈することは、労働者階級の斗争にたいする無責任さを意味する以外のなにものでもないであらう

地区党ならびに全党の同志諸君!!

全日本の戦斗的労働者、農民、学生、インテリゲンチャ諸君!!

われ〳〵は、諸君がわれ〳〵とともに日本共産党を眞の革命的前衛党に再生させるため、決起し、結集することを訴える!!

われ〳〵は、この党内斗争を一地区内にとどめず、全都的、全国的に拡大し、レーニン主義の原則にもとづく党を確立することに全力をあげるであらう。

われ〳〵は党中央の民族主義と日和見主義、それを維持していくための官僚主義と斗い、党のボルシエヴイキ化と戦斗化のために、徹底的に斗いぬくであらう。

われ〳〵は、社会主義革命とプロレタリア独裁の樹立にむかつて、正しい革命理論を確立するために、徹底的な相互討論を組織するであらう。そしてわれ〳〵は、われ〳〵自身の内部において相互の批判と討論の自由を完全に保障するであらう。これがわれ〳〵の組織原則である。

港地区党の同志諸君!!

われ〳〵は、才四回港地区党会議で選出された正規の地区委員会である、東京都委員会、中央委員会が、いかに不当にわれ〳〵を排除しようとも、われ〳〵はみづからの戦列をかため、地区党の指導と運営に今後も全力を傾けるであらう。混乱し、動揺することなく、才四回地区党会議で選出された地区委員会の旗のもとに、すべての細胞と、すべて同志が結集することを訴える。同時に、一部少数地区委員の策謀とデマを完全に粉砕することを訴える。

全日本の労働者、農民、学生、インテリゲンチャ諸君!!

日本共産党を眞に戦斗化し、ボリシエヴイキ化させるためこの歴史的な党内斗争にわれ〳〵と共にたち上り、日本プロレタリア革命の栄誉ある担い手となることを訴える。

日本の首都東京の中心地、港区の中で起つたこの焔は、僚原の火のごとくひろがり、必ず全都的、全国的に拡大し、勝利するであらう。

われ〳〵は、安保改定阻止、岸内閣打倒の斗いにたち上つている全日本の戦斗的労働者と学生諸君に心からなる激励の挨拶を送る。

一九五九年十二月十三日

日本共産党

東京都港地区委員会